

## 巻頭言

「ヒマラヤ学誌 11 号」をお届けする。

ヒマラヤ学誌は、高地における医学・生理学、生態学、人文・社会学など、多様な領域をまたぐような学際的な論文を掲載してきた。

周知のように、標高 3 千メートルでは、大気中の酸素濃度は平地の  $3/4$ 、5 千メートルでは  $1/2$  となる。高地は、低酸素という人間の生理にとってきわめて過酷な自然条件が存在し、ヒトが高地に住み着くためには、低酸素適応という遺伝的な身体の改変が必要であった。遺伝子による生物学的適応とは対照的に、文化的適応は、自分自身の身体的構造の変化を最小限にとどめ、新しい文化をまとうことによって外界に適応してゆく。この文化的適応の結果を文明と呼ぶならば、高地にも文明ともよぶべきシステムが存在する。高地は、低酸素、高紫外線、限られた生態資源などのため、人間の生活域としては過酷な環境である。しかし、世界の高地には、ヒトが長い時間をかけて人体の生理的適応を完成し、それぞれの地域固有の工夫に基づく天然資源の賢明な利用という文化的適応を通じて、相対的に持続的な生活圏を形成してきた。しかも、それぞれの地域で高地特有の絶妙な社会システムを構築し、高度な精神世界をもつくりあげてきた。高地住民は低地の文明を戦略的にフィルターにかけ、高地に適合する技術や制度のみを選択して残してきた。しかし、近年のグローバル化は、高地にもおよびつつあるのが実情である。長い時間をかけて低酸素に適応してきた高地住民の身体機構が、グローバル化による生活習慣の変容と寿命の延長によって、高齢期にあらわれてくる問題点が、本誌でも論ぜられている。高地は、21 世紀の人間・環境作用環を考えるうえでのフロンティアとも位置づけられよう。

ヒマラヤ学誌は、1990 年の京都大学ヒマラヤ医学学術登山計画を機に発刊された雑誌である。京都大学学士山岳会 (AACK) の有志が中心となって京都大学ヒマラヤ研究会 (ASH) を組織し、主としてそのメンバーによって編集が継続されてきた。AACK から継続的な助成を受けている。途中で数年の間隔をおかざるを得なかったが、9 号からは、総合地球環境学研究所「高所プロジェクト」研究班 (人の生老病死と高所環境—「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応、プロジェクトリーダー：奥宮清人) (以下、地球研「高所プロ」と略) の編集委員会と協働して編集し、ここ数年は主として地球研「高所プロ」の研究成果を発表する機関誌として機能している。

ヒマラヤ学誌 11 号では、地球研「高所プロ」の成果として、21 本の原著論文と 1 編のエッセーを収載した。内訳は、中国青海省高所住民を対象とする医学調査から原著が 4 本、インドのラダック調査から得られた所見として 8 編の論文、北東インド・アルナーチャル・プラデーシュからの論文 2 本を掲載した。平成 21 年 12 月に地球研「高所プロ」が主催して京都で開催した国際シンポジウムにおいて発表された外国人研究者 6 名の論文も収載した。本誌 11 号では、地球研「高所プロ」の成果とは別に、東京在住の AACK 会員が中心となって活動をしている雲南懇話会からも 7 編の寄稿をいただいた。

学際的な本誌を通じての、いっそう活発な討論を期待するものである。

編集委員を代表して：松林公蔵